地域連携・フロンティアセンター

平成 29 年度実績報告

日本赤十字看護大学 Frontier Center
地域連携・フロンティアセンター

目次

Ⅰ．目的と運営 1
A．目的 1

B．組織運営 1

Ⅱ．事業 3

A．地域連携部門 3
1．公開講座 3
2．広尾中学校模擬授業 5

B．災害看護部門 6
1．武蔵野市地域防災活動 6
2．なみえプロジェクト 8
3．広尾地区防災連携会議 10

C．継続教育部門 12
1．フロンティアセミナー部会 12
2．認定看護師スキルアップ研修会部会 14
3．実習指導者研修部会 16
4．ホームカミング・デー 26

D．実践研究部門 28
1．ケアリング・フロンティア広尾 28
a．リサーチ・フェスタ 28
b．高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト 30
c．UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース 31
d．小児看護研究会　CandY（Children and You） 32
e．TRC 研究会（Total Renal Care） 33
f．セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会） 34
g．シームレスな看護師教育モデルの検討 35

Ⅰ．目的と運営

A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護の可能性を追求し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターをその前身としている。

新たな発想で創造的な活動を行う必要があるとの共通認識のもとにスタートして 10 年目を迎えた平成 27 年度、地域連携の推進をその活動の中心に据えることをその目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新しい出発となった。

平成29年度4月より、地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され地域連携・フロンティアセンター運営委員会となった。その際、本学の地域社会連携ポリシーについては地域社会連携、産官学連携を強調した改正を行い、それに伴い組織、機能に関する規定も下記のとおり改正した。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

（1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
（2）看護実践の研究活動を通してその知見を学内外に発信する。
（3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
（4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

B. 組織運営（図1）

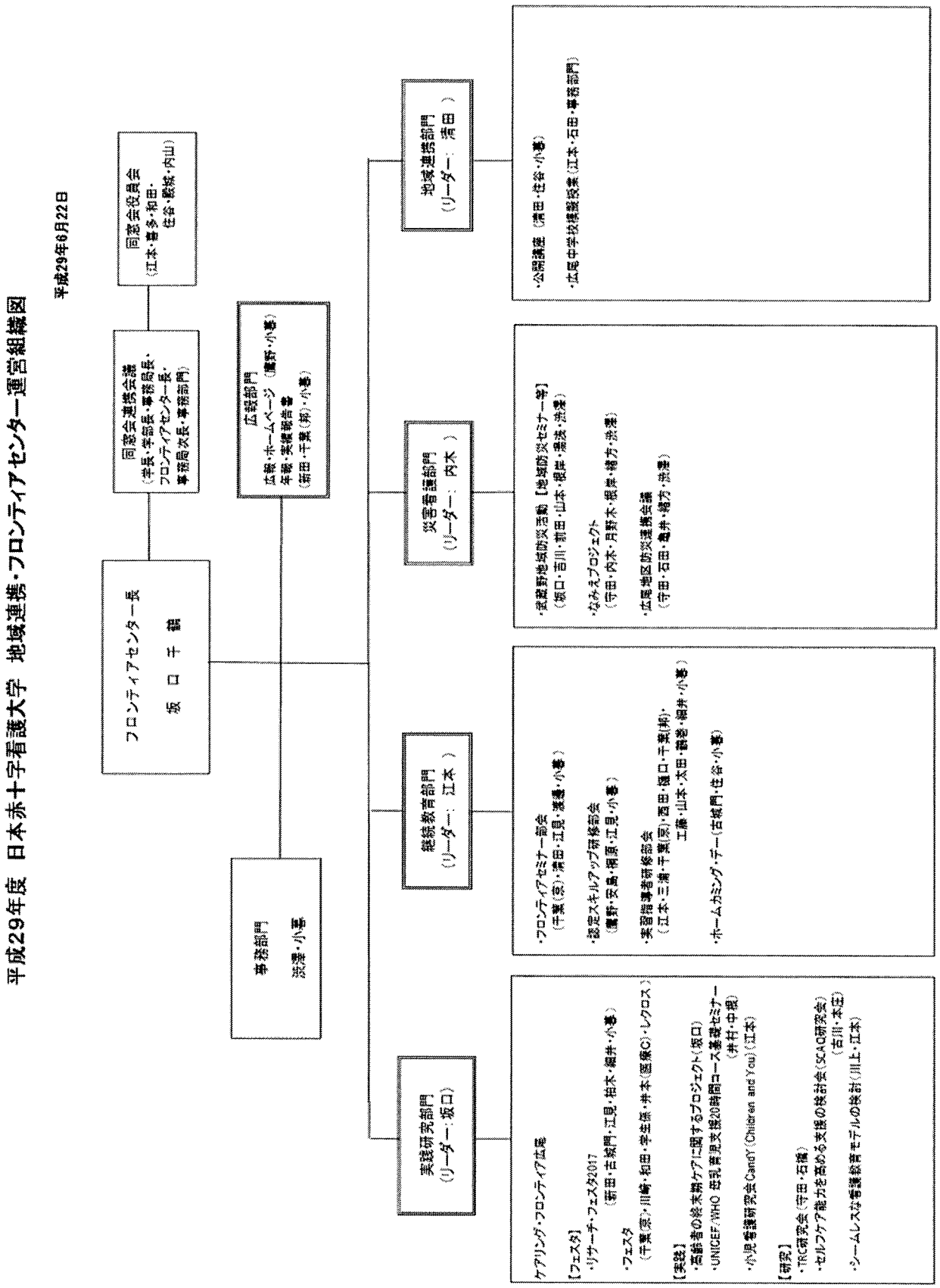
フロンティアセンターの活動は、①地域連携部門として、公開講座、広尾中学校の模擬授業、②災害看護部門として、地域防災セミナー、なみえプロジェクト、広尾地区防災連携会議、③継続教育部門として、フロンテイアセミナー部会、認定スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、ホームカミング・デー、④実践研究部門として、実践と教育との連携の中で実施するリサーチ・フェスタ等のケアリング・フロンティア広尾の活動がある。

同センターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会において検討している。平成29年度、運営委員会は、年 11 回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。平成29年度の各事業実施にあたっては、学内の教職員のほか前年までの事業の参加者、修了者など幅広い力を得て運営した。

平成25年度より開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は5年目となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院等と協働の独立した組織として各プロジェクトを定着させるとともに新たな可能性を探り始めた。災害看護支援活動のうち、武蔵野地域防災活動は長年にわたる実績をもとに武蔵野市との協定を結び、多くの市民の方の参加を得て実施している。浪江町健康支援は平成28年度をもって本社からの支援を終了し、今年度より本学だけで支援活動を行っている。認定看護師教育課程は平成26年度末をもって閉講したが、認定看護師へのスキルアップセミナーは大変ニーズが高く多くの修了生等の参加を得て継続開催している。

今後は本センターが中核となり、大学と地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

図1. H29年度運営組織図



Ⅱ. 事業

A. 地域連携部門

1. 公開講座

公開講座では、一般公衆の保健福祉看護に関する知識の向上を図るため、平成 9 年度から一般の方を対象に開催をしている。相互に研鑽し合えるような住民参加型の公開講座を目指し、これまでも参加された方々からは、時代のニーズに即し生活に活かせる内容であったとの意見も頂いている。現在は教員の教育研究成果を社会に還元し、高齢者向けの生涯学習支援として開講しており、多くの高齢者の方を中心に参加いただいている。

平成 29 年度は、「人とつながり健康に生きよう」をメインテーマに、第 1 回「～地域とつながり健康に暮らす～ほどほどの“おせっかい”の関係が支える」、第 2 回「“更年期”と上手くつきあう」、第 3 回「世界から見る日本人の生き方」の全 3 回の講座を開講した。

a. 公開講座の趣旨

平成 28 年度は、本大学が 30 周年を迎え、看護大学としての看護の力をアピールするという点も強調し、3 回の講座を本大学の看護教員と本大学のコースを修了した認定看護師に講師を依頼した。アンケート結果として好評であったため、今年度も学内の教員を中心に本学の専門性を活かした講座を企画できるようにした。昨今のテーマが、認知症、糖尿病、慢性呼吸器疾患、メンタルヘルスなど疾病や症状の予防・コントロールなどが続いたため、アンケート結果も考慮し、共生社会の中で健康を考えることのできる講座を企画した。

b. 公開講座の開催内容

第 1 回は、本学 DNGL 教授である田村由美先生より、「～地域とつながり健康に暮らす～ほどほどの“おせっかい”の関係が支える」をテーマに講演いただいた。

今後、住み慣れた地域の中で健康に暮らすためには、「ほどほどの“おせっかい”の関係」が大切になってくるということ、また、その“おせっかい”のほどほどが難しいことを、すでに地域で過ごすことが浸透しているオランダと日本とを比較しながらお話いただいた。

参加者からは、ほどほどのおせっかいの関係を実際につくることの難しい現状を感じるが、地域住民がお互いを理解する環境づくりや、お互いさまと思える気持ち、助けてと言える関係づくりの必要性についての意見がよせられた。

第 2 回は、本学母性看護学准教授である新田真弓先生より、「“更年期”と上手くつきあう」をテーマに講演いただいた。女性だけでなく男性の更年期の特徴もふまえてお話しいただいた。参加者の約 3 分の 1 が男性であり、男女ともに自身について、お互いについて、家族についての更年期を考える機会となっていた。

また、講座を受講することによって、忙しい日々の中で一旦立ち止まり、自身の身体を見つめる機会となっていたようである。

第３回は、本学専門基礎科目教授である井上忠男先生より、「世界から見る日本人の生き方－幸福について考える－」をテーマにご講演いただいた。先進国ではないが幸福度の高いブータン、日本で幸福度の高い福井県などをあげながら、共生社会で幸福を実現していくことの意味や、人は他人の世話にならずには生きられない存在であることなど、人とつながって生きていることを深く考える機会となった。

また、参加者それぞれが自分の幸福について考える機会にもなっていた。

c. アンケート結果

1. 受講者の背景

(1)参加人数

	受講者数
第1回： 6月16日	83
第2回： 9月27日	34
第3回：10月11日	69

(2)年齢層

	20代・以下	30代	40代	50代	60代
第1回： 6月16日	0	3	3	12	10
第2回： 9月27日	2	2	4	6	5
第3回：10月11日	0	0	5	12	13

(3)職業

	会社員	公務員	医療職	専業主婦	無職
第1回： 6月16日	3	1	10	18	22
第2回： 9月27日	3	1	1	9	6
第3回：10月11日	6	1	4	14	24

(4)受講者の住まい

	東京23区内	東京都下	神奈川県	埼玉県	千葉県
第1回： 6月16日	60	3	4	3	6
第2回： 9月27日	26	1	2	1	2
第3回：10月11日	49	2	4	3	3

(5)これまでの公開講座への参加回数

	0回	1回	2回	3回	4回以上
第1回： 6月16日	18	5	10	5	37
第2回： 9月27日	14	1	2	3	12
第3回：10月11日	19	5	6	8	25

2. 公開講座に関する情報収集方法

(6)公開講座をどのように知ったか（複数回答可）

	本学からの通知（葉書）	ホームページ	ポスターちらし	口コミ	その他
第1回： 6月16日	49	1	11	6	4
第2回： 9月27日	19	2	7	4	1
第3回：10月11日	37	2	18	4	5

3. プログラム内容

(7)プログラムの内容について

	非常に良い	やや良い	あまり良くない	良くない	無回答
第1回： 6月16日	44	20	0	0	12
第2回： 9月27日	19	6	1	0	6
第3回：10月11日	46	9	0	0	8

4. 会場の設備・運営

(8)会場の設備・運営について

	非常に良い	やや良い	あまり良くない	良くない	無回答
第1回： 6月16日	44	22	1	0	11
第2回： 9月27日	20	7	0	0	5
第3回：10月11日	37	16	2	0	8

2. 広尾中学校模擬授業

渋谷区立広尾中学校の「総合的な学習の時間」への協力要請受け、平成29年12月1日（金）11時05分～12時30分、本学にて、70名の中学生1年生を対象に優しい気持ちをはぐくむことを目的とした講義を開催した。講義は3部構成から成り、①三角巾を用いた災害時の応急処置を国際・災害看護学領域が、②赤ちゃんとのコミュニケーションを小児看護学領域が、③文字盤とレッツチャットを用いた言葉の障がいがある人とのコミュニケーションを地域看護学領域が担当し、これらを体験しながら学ぶ学習が展開された。中学生はみな初めて体験するものばかりであったが、外傷を受けたときの手当てや弱者である子どもや障がい者との接し方を楽しく学び、質問をするなど自ら学ぶ姿勢も見られ好評を得た。

今後も広尾中学校の要請を受けた場合、どの領域がどのような内容を提供するか十分に検討するためにも、年度末までに開催の決定を行えるよう広尾中学校側との連携が必要である。

本学で展開した「総合的な学習の時間」は以下のスケジュールに沿って行われた。

<table>
<tr><td>グループ</td><td>内容</td><td>A</td><td>B</td><td>時間</td><td>内容</td><td>C</td><td>D</td></tr>
<tr><td>担当</td><td></td><td>鹿倉先生</td><td>長崎先生</td><td></td><td></td><td>宇田川先生</td><td>渡邊先生</td></tr>
<tr><td>生徒数</td><td></td><td>17-18名</td><td>17-18名</td><td></td><td></td><td>17-18名</td><td>17-18名</td></tr>
<tr><td>11時05分</td><td colspan="7">全員集合（ 211講義室 ） ・ 本日の体験学習についての話し（大学・坂口先生）</td></tr>
<tr><td>11時10分</td><td colspan="7">5分で移動</td></tr>
<tr><td rowspan="5">11時15分
スタート</td><td rowspan="5">災害対策演習</td><td colspan="2">207講義室</td><td rowspan="2">11時15分
スタート</td><td rowspan="5">コミュニケーション演習</td><td>実習室1</td><td>実習室3</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">三角巾の使い方 （災害）</td><td>障がい（地域）</td><td>赤ちゃん（小児）</td></tr>
<tr><td>11時30分</td><td colspan="2">5分で移動</td></tr>
<tr><td rowspan="2">11時35分
スタート</td><td>実習室3</td><td>実習室1</td></tr>
<tr><td>赤ちゃん（小児）</td><td>障がい（地域）</td></tr>
<tr><td>11時50分</td><td colspan="7">5分で移動</td></tr>
<tr><td>11時55分
スタート</td><td rowspan="5">コミュニケーション演習</td><td>実習室1</td><td>実習室3</td><td rowspan="5">11時55分
スタート</td><td rowspan="5">災害対策演習</td><td colspan="2">207講義室</td></tr>
<tr><td>障がい（地域）</td><td>赤ちゃん（小児）</td><td colspan="2" rowspan="4">三角巾の使い方 （災害）</td></tr>
<tr><td>12時10分</td><td colspan="2">5分で移動</td></tr>
<tr><td>12時15分
スタート</td><td>実習室3</td><td>実習室1</td></tr>
<tr><td></td><td>赤ちゃん（小児）</td><td>障がい（地域）</td></tr>
<tr><td colspan="8">12時30分 終了 現地解散</td></tr>
</table>

B. 災害看護部門

1. 武蔵野地域防災活動

武蔵野地域防災活動は、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の平成 16 年より始まった。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することをねらいとし、平成 29 年度で 15 年である。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、防災ボランティアセミナーを開催してきたが、本年度は昨年度に引き続き、セミナー企画として年間 12 回（平成 29 年 10 月～平成 30 年 3 月）の**「避難支援活動協力員養成講座」**を開講した。昨今、行政や地域での災害対策の必要性が求められている影響もあり、平成 29 年度は受講者数、年齢や地域の拡大等の変化がみられた。昨年同様、武蔵野市役所で開催した。

セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々に拠出している。地域防災活動ネットワークのメンバーは、本学教員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、他大学教員、近隣の病院所属看護師と多岐に渡る。更に本学の学生災害救護ボランティアサークルがメンバーとして一緒に企画運営に加わり、さらに参加者のファシリテーターとして機能していることが特徴である。本学学生は、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学ぶことができる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは、意義が大きい。

各回の参加者数は 40～60 名と幅があるが、地域住民および本学学生を合わせ、平成 29 年度の全 12 回のセミナー参加者延べ数は 508 名であった。

15 年間にわたる武蔵野地域防災セミナーでは、「官」「学」「民」が一体となって地域防災活動に取り組んでいる。首都直下地震、南海トラフ地震などが懸念される昨今、行政のみならず、地域住民にとっても防災対策は喫緊の課題である。受講者は、武蔵野市内のみならず、東京都内、関東圏、東北圏、中部圏に拡大していることからも、「地域防災セミナー」の果たす役割は大きいと言える。「地域防災セミナー」で得た知識・技術・態度が日常や地域防災活動等で活用され、災害時の備えとしてさらに醸成されることを期待する。

平成 29 年度　武蔵野地域防災セミナー

№	日　時		内　　容	会場
1	H29 10/21 (土)	9:30～ 12:30	開講式 講話「避難支援活動協力員とは」 「地域ではじめる防災まちづくり、官民学との連携」 「災害の種類と災害サイクル及び避難指示発令時の対応」	武蔵野市役所　西館
2		13:30～ 16:30	防災ゲーム 「災害時の判断力と支援者の心構え～クロスロード～」	
3	H29 11/11 (土)	9:30～ 12:30	シミュレーション 「DIG (Disaster Imagination Game) で地域を知る」	
4		13:30～ 16:30	基調講話・パネルディスカッション 「現場における要配慮者の対応と課題」	
5	H29 12/9 (土)	9:30～ 12:30	講話　「避難所の開設における行政の役割と官民との連携」 シミュレーション「避難行動支援、武蔵野版 HUG を用いた避難所の開設運営」	
6		13:30～ 16:30	講話・シミュレーション「自宅及び避難所のトイレ使用の可否と対応」	
7	H30 1/27 (土)	9:30～ 12:30	講話「夜間の避難所体験」 シミュレーション　「要配慮者トリアージ～どう防ぐ災害関連死～」	
8		13:30～ 16:30	講話「災害とパブリックヘルス」 演習「要配慮者のお世話の方法」	
9	H30 2/17 (土)	9:30～ 12:30	演習「被災者及び支援者のこころのケア、傾聴訓練」 講習「認知症サポーター講習」	
10		13:30～ 16:30	講話「避難所における食品衛生」 「慢性疾患を持った住民の備え、車中避難への対応」 シミュレーション「在宅避難の備え」	
11	H30 3/17 (土)	9:30～ 12:30	講話・演習「口腔ケアで避難生活の健口そして健康を！」 演習「深部静脈血栓予防」　「癒しのケア」	
12		13:30～ 16:30	基調講演「避難はなぜ難しいか　～二つの大震災から学ぶ～」 シンポジウム「被災者の生活復興を支える活動の体験と今後の課題」 閉講式	

2. なみえプロジェクト

a. 背景

2013年に日本赤十字看護大学と日本赤十字社は、福島県いわき市区域に所在する東京電力福島第一原発周辺町村住民への支援のための活動の在り方を検討し、その経過で浪江町から支援要請があったため、この町の避難住民を支援することとした。浪江町は保健師の確保に苦慮していること、いわき市では借り上げ住宅居住であり住民の安否健康状態の把握が難しいという問題を抱えていた。この活動は資金を日本赤十字社、浪江町から受け、本社看護部と本学が共同で実施している。2013年10月より開始し、今年度で4年間継続した。2017年3月に本社からの資金提供は終了した。これまでの事業は単年度の契約あり、年末に打診し、1月に大よその決定がされ、4月から実施をした。2017年4月より、浪江町と契約し、新たに支援事業を開始することとなった。本事業の継続にあたっては、浪江町から継続の依頼が12月にあり、学内で検討し、2月に大よそ決定されて4月から実施した。

b. 目的

本活動は、いわき市に避難した浪江町民を対象に健康調査と支援を行うことである。目的は、事業依頼内容を検討し、健康状態の把握と見守りを中心とすることとした。その他に、季節の行事にあわせ年に数回の母子サロンを行うこととした。事業目的は以下の3点である。

① いわき市在住の全浪江町民を対象に、各家庭を訪問するなどの聞き取りによる健康調査を実施し健康状態を把握する。その結果から保健医療サービスが必要と判断される場合は、浪江町等関連組織と連携しながら支援につなげる。

② アンケートを実施し浪江町民の健康状態と支援ニーズを把握する。

③ 各家庭を訪問し健康状態に関する聞き取りを行うが、その際、単に健康状態を調査だけでなく、町民の生活や経験に耳を傾け、ナラティブ・アプローチに基づく「語りを聞くケア」の実践を行う。

c. 活動概要

（1）運営

いわき市における「日赤なみえ保健室」（浪江町交流館の2階に設置）は継続し開設した。運営体制については、大学での会議、日赤なみえ保健室会議、浪江町との会議の3つの会議をもち、意見及び情報交換を行った。大学での会議は、事業運営の検討が目的である。主要な教員と事務職員が会議を1回/3ヶ月をし、訪問状況など活動状況、予算執行状況等を協議した（図2)。日赤なみえ保健室での会議は、いわき市に避難する浪江住民の健康状況の周知とフォローアップが目的である。浪江町保健師、担当保健所である相双保健所の支所から浪江町担当保健師、福島県心のケアいわきセンターの看護師、浪江町いわき市担当職員、大学教員が集まり、1回/月定期会議を実施した。

浪江町との会議は、事業全体の検討で、二本松市にある浪江町仮設役場に1回訪問し、保健福祉課と年度初めに事業内容の確認を行った。

業務は、調査（訪問・電話・ポスティング）調整、季節行事交流会調整・ママさんサロンであった（図2)。日赤浪江保健室には非常勤職員を雇用し配置した。保健師3名、看護師2名、事務職1名である。昨年より2名増員し、個々の看護職の負担を軽減した。

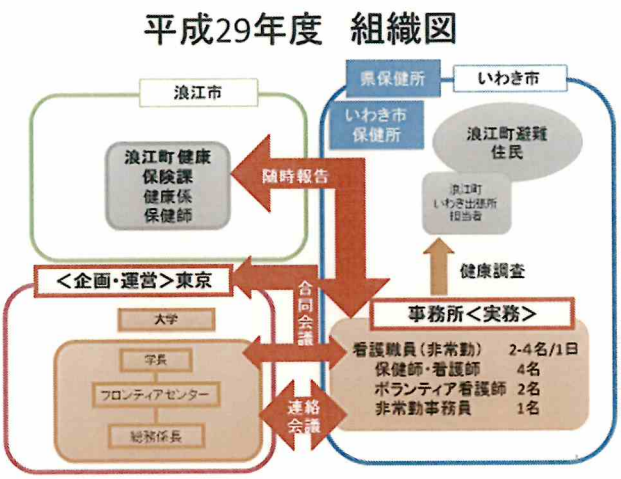


図 2. 組織図

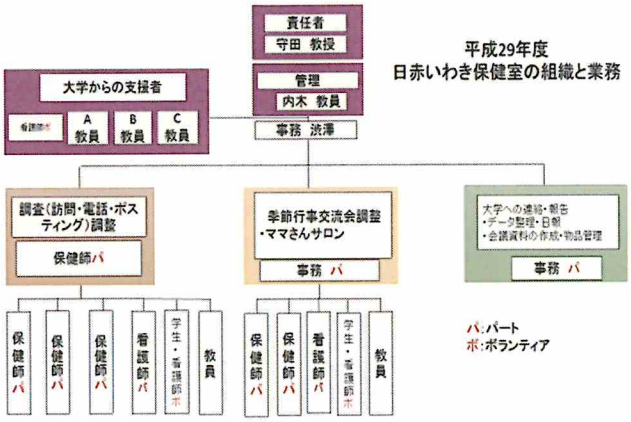


図 3. 日赤なみえ保健室

（2）活動の状況

今年度は①健康調査とフォローアップ事例の継続訪問、②夏休みの母親と子どもの交流「ママさんサロン」を実施した。

① 健康調査

2017 年 4 月～2018 年 2 月までの実績は、家庭訪問 159 戸、電話による調査 193 戸、電話での応答なしまたは調査必要なしとの回答のケース 138 戸であった。電話をかけた合計件数は 685 回であった。このうち、フォローとなったケースは 10 名であった。

② 夏休みの母親と子どもの交流「ママさんサロン」

このイベントは 8 月 4 日（金）9:30～12:30、いわき市中央台公民館を借りて行った。参加者は子ども 26 人、母親 16 人、スタッフ 12 人であり、前年度まで月に 2 回行っていたママさんサロンの参加者が多くを占めたが、初めて参加する方もあった。母と子のレクリーションでは、ヨーヨー釣り・ボーリング・魚釣り・輪投げ・ボール投げ（玉入れ）などを行い、お昼にカレーライスを食べるなど、母親同士の交流のきっかけとなっている。

写真：ママさんサロンの様子

d. 来年度の課題と展望

避難指示解除準備区域及び居住制限区域については、平成 29 年 3 月 31 日に避難指示が解除され、2017 年 4 月より浪江町の帰還困難地域以外の地域では帰還が可能となった。これにより、浪江町は役場を二本松市から浪江町に移動した。しかし、浪江町に居住しているのは 234 人であり、住民基本台帳上の 12.8%に過ぎない(2017 年 5 月 31 日)。反面、いわき市への浪江町民の移動は微増であるが、増えている状況がある。帰還が可能となっても住民の居住地は変化がなく、浪江町行政の困難は続いている。来年度も 12 月の時点で浪江町からの依頼があるため、現状の事業内容で継続支援を行う予定である。

3. 広尾地区防災連携会議

ケアリング・フロンティア広尾　プロジェクト　広尾地区防災プロジェクト　平成29年度報告書

プロジェクトメンバー	日本赤十字看護大学（守田・石田・亀井・織方・渋澤）；日本赤十字社医療センター(丸山・板垣・加藤・高木)；総合福祉センター（岡本・清水・関口）；乳児院（臼井・福澤）；助産師学校（近藤・芳賀・加瀬）；研修センター（大和田・武口・由比）；渋谷区医師会（渡辺・高橋）；渋谷区（倉増）の22名
プロジェクト目標	広尾地区の日赤6施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能の強化と人材育成、災害時のスムースな連携を目的とする。さらに行政、医師会、住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げる。
平成29年度の報告	プロジェクト会議を5月17日、7月20日、10月19日、12月21日、3月15日の5回、18時30分～20時位に開催し、上記目標に基づいて2つの班（1．防災訓練・イベント班；2．広尾地区災害連携マニュアル班）に分かれ活動した。また、別途5日間、合同で活動したので下記のとおり報告する。 **1．防災訓練・イベント班の活動** 1）氷川地区合同防災訓練 ①5月21日（日）午前中、区立広尾中学で住民200名の参加にて実施した。4つの種目のうち「応急救護訓練」を、医師会、研修センター、乳児院、医療センター、看護大学、大学院生が担当し、「搬出搬送訓練」のうちの「トリアージ実演」と「傷病者メイク」、レジ袋やストッキングを使った止血や固定法を実施した。 ②11月19日（日）9時40分～12時15分　区立広尾中学校にて広尾中学校生徒200名と氷川地区住民60名を対象に合同防災訓練が開催され、本プロジェクトは応急救護班の演習技術である三角巾の取扱い方法とAEDの演習を行った。 2）広尾中学校防災Jr.チーム訓練 ①6月8日（木）13時35分～15時15分広尾中学防災Jrチーム訓練にて、2年生を対象に避難所運営ゲームHUGを日本赤十字社東京都支部と亀井が実施、大学院生は見学参加した。 ②7月5日（木）13時35分～15時15分広尾中学防災Jrチーム訓練にて、1年生を対象に避難所運営ゲームHUGを亀井と大学院生が実施した。 3）セミナーの開催 ①2月3日（土）10時～12時30分　「災害時の自分の役割を考えていこう－都市型災害を例にして－」大学近隣の地域住民を対象にワークショップを実施した。参加者は41名であった。 **2．広尾地区災害連携マニュアル班の活動** 「広尾地区6施設の施設状況・支援受援体制」について、「支援・受援についての連携構想可視化シート」を確認した。施設連携上の課題を検討した結果、「6施設の連携は困難」であることが明らかになった。まずは、個々の施設でそれぞれの活動を行いつつ、適宜連携することとなった。また、渋谷区警察署の取り決めでは、本学は、「遺体安置所」とされているが、様々な要援護者への支援なども実施可能なことから、渋谷区に役割の見直しを依頼した。

今年度の課題	1．　防災訓練・イベント班：①住民により多く参加してもらえるよう「活動の見える化」と広報、②計画的で継続可能な住民支援、③熱中症などへの配慮（継続）が活動上の課題として挙げられた。 2．　マニュアル班：①それぞれの施設における様々な時期・日時でのシミュレーションの実施、②大規模災害時の後方支援の可能性の検討（レクロスでの傷病者受け入れや大学学生の活動内容とその可能性）が挙げられた。
来年度の予定	1．防災訓練・イベント班：引き続き地域住民参加型のイベントの開催と広尾中学校防災Jrチームの支援活動を実施する。計画的に住民に情報を発信し、継続的な取り組みを提示する。 2．マニュアル班：各施設での役割の確認をしつつ、本学が「遺体安置所」としての役割や新たな役割を指定されたのち、改めて、協働すべき施設間で、具体的な連携方法を検討する。

広尾中学校における氷川地区合同防災訓練の様子

本学におけるセミナーの様子

広尾中学防災Jr訓練の様子

C. 継続教育部門

1. フロンティアセミナー部会

平成29年度のフロンティアセミナーは看護の現場でさまざまな背景を持つ看護職者が増えている現状を鑑み、「看護へキャリアチェンジをした人とともに」をテーマとして企画した。

a. フロンティアセミナーの趣旨

フロンティアセミナーは「シームレスな人材育成をデザインする」というテーマを掲げ、看護大学・大学院が持つ教育的な機能を活用した人材育成の提案、病院全体に教育的関心を育成するような組織文化を醸成することの重要性とその具体的方略を報告してきた。今年度は看護の現場でさまざまな背景を持つ看護職者が増えている現状を鑑み、看護職以外の職種から看護職へのキャリアチェンジを行ってきた看護者と、キャリアチェンジを行ってきた看護者を支援する病院側指導者の声を伺うこととした。出来る限りシームレスなキャリアチェンジを支えることを通し、組織がより豊かになるための現任教育のあり方について考える機会とした。

b. フロンティアセミナー開催内容

平成29年度のフロンティアセミナーは、平成29年12月2日（土）13:30～16:30、日本赤十字看護大学201講義室で開催した。参加者は45名（学外者23名）であった。今年度はシンポジスト4名によるシンポジウムとした。

最初に、キャリアチェンジを行った看護職者として日本赤十字社医療センター　助産師　樋口由紀子さんより「看護師へのキャリアチェンジ」のテーマで発表が行われた。次に、東京都立府中療育センター　看護師　武田紀子さんより「看護師にキャリアチェンジして-看護師7年目のわたし-」のテーマで発表が行われた。お二人からは看護における社会人経験者の入学割合などの社会的情勢、看護職を目指した動機、看護教育や継続教育で経験されたことや望む指導、自己学習の重要性など貴重な経験や本音とともに学習者としての自覚も語られた。そしてキャリアチェンジを行なってきた看護者を支援する病院側指導者として、済生会横浜市東部病院　救急救命センター外来看護師長　須﨑大さんより「看護へキャリアチェンジした人を支援する心得-経験を通して学んだ「ギャップ」と「キャリア」を理解することの大切さ-」のテーマで発表が行われた。看護師教育の現状と課題、具体的な支援と支援が組織にもたらした影響など、その内容は大変興味深いものであった。最後は、本学の看護教育学准教授　西田朋子さんより「看護へキャリアチェンジした人とともに-背景が多様な看護職員と共に、豊かな組織を作るために-」のテーマで発表が行なわれた。多様な背景をもつ看護職員に対する調査結果をもとに、キャリアチェンジした看護者と病院管理者の相互が、互いの経験を生かしあう環境づくりの重要性について語られた。社会人経験者の経験を活かす、異質を受け入れる、互いを尊重することが組織を豊かにすることが説明された。

c. フロンティアセミナーの評価について

アンケート結果では、シンポジウムについて約85%が「とてもよかった」「よかった」と評価していた。広報活動が十分でなかったため参加者数は多くなかったが、臨床でさらに多様な背景の看護者が増えることが考えられることから興味深いテーマであったと考える。

d. アンケート結果

回収アンケート枚数　27 枚（参加者 45 名, 回収率　約 60%）

1．セミナーを知った情報源　※複数回答あり

①チラシ・ポスター　14 名（46.66%）　②セミナー案内　6 名(20.0%)

③本学ホームページ　2 名(6.67%)　④友人・知人　2 名(6.67%)

⑤その他　6 名(20.0%)（内訳；上司の勧め 1 名, 学校教員からの案内 1 名, 大学からの案内メール 2 名, 未記入 2 名）

2．セミナーの内容について

	とても よかった	よかった	ふつう	あまり よくなかった	よくなかった	未記入
シンポジウムの内容	14 名 (52%)	9 名 (33%)	3 名 (11%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)	1 名 (4%)
セミナー全体の運営	9 名 (33%)	12 名 (44%)	4 名 (15%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)	2 名 (7%)
会場設備	12 名 (44%)	13 名 (48%)	1 名 (4%)	1 名 (4%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)
スタッフ対応	12 名 (44%)	11 名 (41%)	4 名 (15%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)	0 名 (0%)

3．ご意見・ご感想・お気づきの点（抜粋）

・女性が専門職で子育て等の役割を果たしながら学び、働き続けられるための支援の多様性（学校として、社会として）を考えていくことの大切さを改めて感じた。

・貴重な経験談を聞くことができ、今後の自身のキャリアを考えることができた。また、自分と異なるキャリアを持つ人の受容の姿勢を大切にしたいと感じた。

・キャリアチェンジは一般急性期の中小病院においては新人確保の切実な問題。働き方のダイバーシティは浸透してきたことを実感しているが、今後は進路のダイバーシティの必要性を痛感した。

・患者の多様性だけでなくスタッフの多様性にもっと関心を持つことが大切だと気付いた。

・貴重な話を当事者の方から聞けて良かった。ディスカッションもとても興味深かった。

4．今後の希望テーマについて

・看護師としての人格形成、教育プログラム（就業後）

・新人教育の課題と現状

・看護部教育担当者としての必要な知識や技術

・教員の教育や指導について（大学、専門学校、准看学校の教員の条件が広すぎて内容の質に影響している。“経験”だけで伝えることはできない不安。教員のための統一された教育を受けたい）

・社会人経験者と指導者、管理者間のディスカッション（望む指導や、困っていることなど）

・障害者看護についてのアピール、興味をもってもらうためには。(就職希望者の確保が難しいため)

2. 認定看護師スキルアップ研修会部会

a. 2017（平成 29）年度の活動状況

本部会は、年に 1 回開催している認定看護師スキルアップ研修会（以下、セミナー）の企画及び運営を担当する部会で、教員 4 名と事務職員 1 名により構成されている。セミナーは 2015（平成 27）年度より開催されており、本学地域連携・フロンティアセンターにおいて開講していた認定看護師教育課程の 2014（平成 26）年の休止を受け、当時開講されていた「糖尿病看護」「認知症看護」「慢性呼吸器疾患看護」のコース修了生のフォローアップを目的として、開始された。なお、受講者は本学教育課程修了生に限定していない。

b. 2017（平成 29）年度認定看護師スキルアップセミナーの実施状況

過去 2 年は午前に基調講演、午後は 3 領域コース別の分科会方式のプログラム、という構成で運営していたが今年度は、午後に領域を限らない 4 つめのプログラムを設けた。これにより受講者が増え、414 名が受講した。今年度プログラムは表 2 に示すとおりである。

今年度の大きな特徴は、本セミナー申込者から「特定医行為の研修が始まり、認定看護師としてどうしていけばよいのか」といった不安が寄せられたため、急遽、「認定看護師制度について」というディスカッションを組み込んだことである。本学の高田早苗学長、守田美奈子教授、そして基調講演者である川嶋みどり名誉教授が登壇し、特定医行為研修に関する情報提供やフロアー参加者とのディスカッションが行われた。

（ディスカッション「認定看護師制度について」の様子）

c. 2018（平成 30）年度の課題

本セミナーは「3 年間は継続する」という方針のもと開講されたため、3 年目の今年は今後の継続等々の見直しを行う年となった。前述のように 3 コースに限定しなかったこともあり、受講者数が増加した。また、本学修了生以外の受講者数も多く、社会貢献的な意味からも重要なセミナーであると評価できる（表 1 参照）。このため、次年度以降も開催することが決定された。以下の 2 点が、今後のセミナー運営の課題としてあげられる。

表 1．認定看護師スキルアップセミナー参加者数推移　（人）

年度	糖尿病看護	慢性呼吸器疾患看護	認知症看護	認定看護師の感情労働	計
平成 27 年度	91(59)	69(63)	129(48)	－	289(170)
平成 28 年度	106(69)	85(79)	131(77)	－	322(225)
平成 29 年度	83(63)	70(64)	150(52)	111(35)	414(214)

（カッコ）内は本学修了生

1点目が、従来の本学修了生が当番制で本部会担当教員1名とともに企画運営するコース別分科会方式は担当者の負担が大きいという問題点である。また、この方式では全コース修了者にプログラムが提供できず、平等性に欠ける。2点目は、今年の「認定看護師制度について」のディスカッションに参加した本学教員からの「参加者からの発言が活発ではなかった」という意見や、本学教員からの「プログラム全体が座学で認定看護師が主体的に学ぶ場となっていない」という指摘で浮き彫りとなった問題点である。

上記を考慮し、次年度から分科会方式を廃止して参加者が主体的に運営するワークショップ方式を導入する、従来の基調講演を認定看護師がシンポジストとして登壇するシンポジウムに変更する、といった運営を検討中である。いずれにしても、受講生が認定看護師として個々にアイデンティティを持ち生き生きと活躍する、ということを支持するセミナーを目指すことが必要である。

表2. 2017（平成29）年度認定看護師スキルアップセミナー・プログラム

Ⅰ. 9：30～11：30 午前の部（広尾ホール）
基調講演 「看護現場の今を改善するために －認定看護師に求めたいこと－ 」
日本赤十字看護大学名誉教授 川嶋みどり
ディスカッション:認定看護師制度について

Ⅱ. 13：00～15：30 午後の部（※ コース別）
1.糖尿病看護コース
「院内及び地域連携における認定看護師のリーダーシップ」
講演「2025年の地域包括ケアシステムに向けて地域連携を進める中で 糖尿病認定看護師の役割やリーダーシップについて」 元東京大学大学院医学系研究科教授 数間恵子
実践報告・ディスカッション
「糖尿病認定看護師としての地域連携における実践報告」 原町赤十字病院 髙木あけみ
○助言者：尾上和子（小田原市立病院）・山下亜希（大津市民病院）
2. 慢性呼吸器疾患看護コース
「慢性呼吸器疾患患者のＡＣＰを考える ～事例を通して介入のタイミングを考える～ 」
講演「慢性呼吸器疾患患者のＡＣＰを考える」 愛語会要町病院院長 吉澤孝之
実践報告・ディスカッション
「慢性呼吸器疾患と認知症をもつ人の意思決定支援 」
山梨県看護協会 荒川訪問看護ステーション 丸茂砂百合
○助言者：佐藤今子（日本大学医学部附属板橋病院）・千葉恵子（鉄蕉会亀田総合病院）
3. 認知症看護コース
「認知症高齢者の思いを支える看護」
講演「高齢者を全体として理解するとは」 坂口千鶴（日本赤十字看護大学）
実践報告・ディスカッション
「急性骨髄性白血病のターミナル期にあるレビー小体型認知症患者の思いと家族の葛藤に寄り添った看護」 東京慈恵会医科大学附属第三病院 内木場あゆみ
「急性期病院における認知症患者の思いを支える看護 －多職種連携とチームの統一した関わり－」 仙台市医療センター仙台オープン病院 高橋和利
「人生最期の一口を満足していただくかかわりを考える」
特別養護老人ホーム風の樹 淺田ゆみ子
○助言者：宮本良子（長岡赤十字病院）
4. 全コース対象：講義とワークショップ
「認定看護師の感情労働」 日本赤十字看護大学名誉教授 武井麻子

3. 実習指導者研修部会

看護学実習は看護基礎教育において重要な学びの場であり、臨地実習で学生が主体的に学習するためには、学生指導における臨地実習施設と看護基礎教育機関の連携と協働が重要となる。本学では平成25 年度より実習施設の実習指導者あるいは今後実習指導を担当予定である看護者を対象とした実習指導者研修会を開催している。当初、本研修会は実習委員会の担当であったが、大学組織の編成に伴い平成 27 年度からは地域連携・フロンティアセンターの事業として位置づけられ、今年度で 3 年目となった。

実習指導者研修会の目的と運営の基本方針を述べた後、平成 29 年度の実施状況を開催回ごとに報告する。

a. 目的

(1) 本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる。

(2) 大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする。

(3) 実習での「ケアし、ケアされる」という体験を通して、学生が 4 年間にわたり成長していけるような指導体積を構築する。

b. 運営の基本方針

(1) 本学と実習施設が協働し、企画運営を行う。

(2) 受講生が、本学教員や自施設以外に勤務する受講生と情報交換できる場を提供する。

(3) 受講生が‘人を育てる’観を育める場を提供する。

(4) 受講生には、研修修了時に「日本赤十字看護大学　実習指導者研修会　修了証」を発行する。

c. 平成 29 年度の実習指導者研修会

(1) 企画および運営

本研修会は、本センターの研修部門に位置付く実習指導者研修部会を構成する教員 10 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合計 5 名）と協働で開催した。

平成 29 年度は実習指導者研修部会の学内企画会議 5 回、学内・学外企画会議 5 回を開催し、内容の充実を求め企画・運営を行った。事務作業については、地域連携・フロンティアセンターを担当する本学事務職員が、様々な作業を担い、研修会の円滑な運営を支援した。

今年度の実習指導者研修会は、例年同様に開催期間は 6 月～1 月とし、開催回数は 5 回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした。

昨年度と変更している内容および企画は以下の点である。

・2 回目「実習指導の実際①」において指導案の週案と日案の資料改善

・3 回目「リフレクションの概念と実際」をテーマに新たな講義の追加

・4 回目「実習指導のリフレクション」は学外企画委員による企画・運営

・5 回目「実習指導の体験を語り合う」では、実習指導に留まらず、病院組織の一員として視野を広げる企画

なお、今年度はフロンティアセミナーとの共催企画は実施せず、OB 会は各病産院からの参加者調整などの課題もあるため見送ることとした。

（2）実習指導者研修会プログラム

平成２９年度　実習指導者研修会プログラム

平成 29 年度

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
平成 29 年 6月21日 （水） 受付開始: 8：30	9:10-9:30	**開校式／オリエンテーション**	
	9:30-10:50	**教育心理　ー学習者の心理ー** 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性、状況的学習論	遠藤公久先生 本学 教授
	11:00-12:20	**教育原理　ー教育原理と実習指導ー** 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	山﨑裕二先生 本学 教授
	13:20-15:50	**教育方法　ー状況に埋め込まれた学習ー** 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	16:00 -16:20	**オリエンテーション**	
8月９日 （水） 受付開始: 9：00 ガイダンス 9：20	9:30-10:50	**教育課程と実習の位置づけ** 教育カリキュラムと実習の位置づけ	企画委員
	11:00-12:30	**対人関係論ープロセスレコードを用いてー**	小宮敬子先生 本学 教授
	13:30-15:00	**実習指導概論** 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学 教授
	15:10-16:40	**実習指導の実際①（演習Ⅰ-1）** Group Work にて、実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
8月10日 （木） 受付開始: 9：00 ガイダンス 9：20	9:30-12:10	**リフレクションの概念と実際**	西田朋子先生 本学　准教授
	13:10-16:40	**実習指導の実際②（演習Ⅰ-2）** Group Work にて、実習指導案を作成	企画委員 実習担当教員
8月～11月	**実習指導に関する実習（実習指導案を用いた展開）** ＊申し込みをされた方は、**他施設にて実習指導の見学（オプション1）**		
11月28日 （火） 受付開始: 9：00 ガイダンス 9：20	9:30-10:30	**実習指導のリフレクションと実習指導の実践** Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員
	10:40-12:10		
	13:10-14:40	**看護とケアリング** 看護の概念、ケアリング	守田美奈子先生 本学 教授
	14:50-16:20	**看護倫理** 看護と倫理、実習指導と倫理	高田早苗先生 本学 教授

平成30年 1月30日 （火） 受付開始: 9：00 ガイダンス 9：20	9:30-12:10	**実習指導の実際③**（演習Ⅱ） Group Workにて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、実際の実習指導で得た学びを深める	企画委員
	13:10-15:40	**実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ** 実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディスカッション	
	16:00-16:30	**修了式・閉講式**	

※　講師および内容につきましては若干変更となる可能性がございます

（3）受講者の構成と受講者数

本学の実習指導を担っている病産院・高齢者施設に勤務する看護職者とそれ以外の病院に勤務する看護職者、合計67名で研修会を開始した。

（4）全5回の研修会の概要とアンケート結果

■第1回：平成29年6月21日（水）

開校式に続き、①教育心理　②教育原理　③教育方法についての講義であった。

①教育心理-学習者の心理-：現代青年の特徴および学びの心理について本学の遠藤公久教授より講義を受けた。受講生は興味深く受講している様子が見られた。アンケートの結果からも約58名(90.6%)が、良かった・とても良かったと答えており有意義な講義であった。特に現代青年の心理構造が教育社会背景の影響からどのように形成されたかについてや学びの特徴、ADHDや学習障害を抱えた青年への対応について学べた。内容豊富な講義であったが、受講生の中には講義をもう少し聞きたかったという意見もみられ、講義時間の検討は必要と考えられる。

②教育原理-教育原理と実習指導-：学習と教育について、本学の山崎裕二教授より講義を受けた。教育は学習がなければ成立しないこと、教育の目的は生きることに関連すること、実習指導に理論を活かすことの重要性などが説明された。視聴覚教材が有効に使われ、受講生の関心を引き付ける内容であった。アンケートではほとんどの受講生が満足していることがわかる。

③教育方法-状況に埋め込まれた学習-：有元典文教授による講義は、主に演習であり実際に頭や体を使ってのものであった。アンケートでは、「とてもよかった」「よかった」を合わせて100%であり、参加型の研修であったことからも、参加者の集中力を保持し学習する楽しさを学べたものであった。それは、講義の中で紹介された「学習デザイン：自然なやる気がわく場を人工的にしかけること」をそのまま体現されたものであったことがわかる。また、演習の中で、参加者は「正統的周辺参加の理論」を体験している。「正統的周辺参加の理論」は、教え込み的教授行為ではなく、ふだんの社会的実践の中で初心者として古参を目指すことである。参加者は、講義に参加しながら、コミュニティの一人前のメンバーをいつの間にか目指していた。その中で「副産物」とされる「教育」の知識・技能も習得できており、効果的な学習になったと考える。

第１回アンケート　研修生：67 名
回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体
回答者数：64 名(web 59 名、紙 5 名)　回答率：95.5%

Ⅰ．受講生の背景

1．臨床経験

1～2 年	3～5 年	6～10 年	11～15 年	16 年以上
0	13	29	15	7
0%	20.3%	45.3%	23.5%	10.9%

2．役職について

管理職（師長・係長・主任）である	管理職ではない
5	59
7.9%	92.1%

3．病院内・病棟での役割（複数回答可）

教育関連の委員	実習指導者	プリセプター	病棟内での勉強会係	特にない	その他
9	44	13	17	8	11
14.1%	68.8%	20.3%	26.6%	12.5%	17.2%

Ⅱ．本研修会をどこでお知りになりましたか。（複数回答可）

病院から	師長から	同僚・知人から	本学の懇親会	本学の HP	本学の教員から	その他
29	46	6	3	1	0	0
45.3%	71.9%	9.4%	4.7%	1.6%	0%	0%

Ⅲ．本日の内容についてお伺いいたします。

	とても よかった	よかった	どちらでも ない	あまり よくなかった	よくなかった
1．全体的な プログラム	33	30	1	0	0
	51.6%	46.8%	1.6%	0%	0%
2．「教育心理」	32	26	6	0	0
	50%	40.6%	9.4%	0%	0%
3．「教育原理」	35	27	1	0	0
	55.6%	42.8%	1.6%	0%	0%
4．「教育方法」	41	22	0	0	0
	65.1%	34.9%	0%	0%	0%

■第 2 回：平成 29 年 8 月 9 日（水）

8 月 9 日は①教育課程と実習の位置づけ　②対人関係論　③実習指導概論　④実習指導の実際（演習Ⅰ-1）と実習指導の具体的な内容に進んだ。

①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明し、受講生に理解を得た。

②対人関係論-プロセスレコードを用いて-：本学の小宮敬子教授のリードで、実習での患者と学生のやりとりの１場面から学生の言葉と感情、患者の言葉と推測される思いを丹念に読み解く機会を得た。双方が緊張している初対面の状況や、関係性が近くなることによって言葉と感情が一致してくる様子が記録から新鮮に立ち現れることを確認した。プロセスレコードという手法は、ほとんどの看護者が精神看護実習で体験しており共通認識が得られやすかった。急性期病院では、フィジカル面に注目した問題解決志向の記録を余儀なくされているが、感情と言葉に注目したプロセスレコードの展開方法は、患者—看護者関係、学生や新人—指導者関係などの問題解決に活用できる可能性が示された。

③実習指導概論：本学の佐々木幾美教授により講義が行われた。ここでは看護学実習の意義について触れ、看護学実習における実習指導者の役割について学んだ。実習は 1 つの授業形態であり、学生にとっては学びの場であり、その特徴を理解し支援することが大切である。学生の学びを支援するかかわりについて、具体的でとても理解しやすい講義であった。受講生は実際の実習指導場面を思いおこし、照らし合わせながら理解をすすめることができたのではないかと思われる。指導者の関わり方で、学生の学びが変わることを理解し、実習指導者の役割の重要性を感じると共に、本研修受講の意欲が高められる講義であったと思われる。

④実習指導の実際（演習Ⅰ-1）：実習指導案作成という具体的な方法に向け、本学の西田朋子准教授が講義を行った。週案と日案の説明、そして教材となるものは患者と実習指導者・教員と学生の相互作用により生み出されるということ、成人学習者の特徴をふまえることの重要性などが学べた。

■第 3 回：平成 29 年 8 月 10 日（木）

8 月 10 日は①リフレクションの概念と実際　②実習指導の実際（演習Ⅰ-2）　講義と演習の構成であった。

①リフレクションの概念と実際：本学の西田朋子准教授が講義した。講義は主にリフレクションの概念と特徴、リフレクションに必要なスキル、実習においてリフレクションを導入する意味や意義、学生と指導者双方にとってのリフレクションの必要性をとりあげた。講義の理解をより深めるために、演習を導入し、①語る役割、②話を聞き促進する役割、③観察する役割の 3 つの役割を参加者には体験してもらった。アンケートでは、「リフレクションの意味が分かった」「理解ができ、活用できそう」「リフレクションは実際に日々行なっているが、改めて指導でもリフレクションの大切さに気がつく事ができた」という結果が得られた一方、「言葉が難しかった」「相手に問うことが難しかった」など日頃耳にしている言葉や概念、行っているであろうことでも、改めて難しさを実感している受講生もいた。受講生のリフレクションに関するレディネスはさまざまであると考えられるが、理解がより進み実習指導に活かすことができる内容と方法を検討することが改善点である。

②実習指導の実際（演習Ⅰ-2）：専門領域を考慮し、2～5 名を構成人数とした小グループに分かれ、事例をもとに週案あるいは日案の作成に取り組むグループワークを実施した。各グループに学内・学外企画委員と実習担当教員がファシリテーターとして加わった。実習での学生の状況や課題を話し合いながら、指導案作成のポイントを学べたと考える。

第2・3回アンケート　研修生：66名　(8月9日：67名全員出席、8月10日：67名中1名欠席)
アンケート実施日：8月10日（木）
回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体
回答者数：65名(web 61名、紙4名)　回答率：98%

Ⅰ．2日間の内容についてお伺いいたします。

	とてもよかった	よかった	どちらでもない	あまり よくなかった	よくなかった
1. 全体的な	40	25	0	0	0
プログラム	62%	38%	0%	0%	0%
2. 「教育課程と	31	33	1	0	0
実習の位置づけ」	48%	51%	2%	0%	0%
3. 「対人関係論」	33	31	1	0	0
	51%	48%	2%	0%	0%
4. 「実習指導概論」	34	29	2	0	0
	52%	45%	3%	0%	0%
5. 「実習指導の実際	33	31	1	0	0
①（演習Ⅰ-1）	51%	48%	2%	0%	0%
6. 「リフレクション	38	26	1	0	0
の概念と実際」	58%	40%	2%	0%	0%
7. 「実習指導の実際	39	25	1	0	0
②（演習Ⅰ-2）GW」	60%	38%	2%	0%	0%

■第 4 回：平成 29 年 11 月 28 日（水）

8 月以降は、実際に指導案を立案して実習指導に取り組む状況になっている。そこで、11 月の本講習会では演習となる①実習指導のリフレクション　この他に②看護とケアリング　③看護倫理、の 2 講義を企画した。

①実習指導のリフレクション：講義で学習した内容を実習指導で体験し、学習と体験を結びつけることで指導スキルを身に着けることを目的のひとつとし、企画委員が主催した。受講生は指導場面を複数書きとめて参加し、小グループで発表、その後に中グループとなり共有、全体ディスカッションの形式をとった。アンケートでは 91%が「学習内容と実践を結びつけることができた」あるいは「まあまあできた」と評価しており、具体的には「講義内容を現場レベルにおろすためわかりやすかった」「学習を意識しながら実践することで頭の中を整理して指導することができた」などがあげられた。また、「グループワークでより深めることができた」との意見も多く、発表形式についても「良かった」と評している意見を得た。実習指導案の作成は「難しかった」や「学生担当していない」との意見が約 30%あった。実習指導のリフレクションという面では評価できるが、実習指導案作成については今後の課題としたい。

②看護とケアリング：本学の守田美奈子教授による講義であった。講義内容はケアリングに注目する理由や概念の発展、看護実践とケアリング能力についてや能力を育むための教育課題について語った。グループワークを取り入れた参加型の講義であった。ケアリングの概念を理解することは、実習生が実習という経験学習の場でケアを通して知識や技術を獲得できるような関わりを持ち、その関わりを通して自分自身も成長することにつながる。日々のケアの気づきと振り返りの意味づけを行うことにより、自分自身がケアを通して成長することの大切さが示された。

③看護倫理：本学の高田早苗学長による講義であった。看護倫理では、学生時代から倫理的視点を育む教育をテーマに講義がされた。これまでの研修や演習、現場での実践、振り返り等を通して考えてきた臨地実習のあり方について、倫理的視点からもその意味や意義を考えることができた。学生の倫理的能力を育むには、実習を受け入れる施設の職場風土が大きく影響する。学生は体験から様々なことを考え、感じ、悩んだり、気づいたりするがそれを言葉にすることはなかなか難しい。それをチームの一員として尊重し、共有できる現場でありたいが、自分の職場はそうなっているだろうかと考えさせられる受講生も多かったのではないだろうか。学生の学びを促進する関わりをすることは、学生だけでなく、指導者や受け入れる現場にとっても学ぶことができる機会なのだとあらためて感じる講義であった。

第４回アンケート　研修生：66 名
回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体
回答者数：59 名(web 57 名、紙２名)　回答率：89%

Ⅰ．実習指導のリフレクション、実習指導の実践についてお伺いいたします。

1．自施設において実習指導案を立案し、実習指導を実践できましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
10	28	3	8	8
18%	49%	5%	14%	14%

2．事前課題の「実習指導で経験した場面」において、研修で学んだ学習内容と実践を結び付けることができましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
23	29	2	3	0
40%	51%	4%	5%	0%

3．事前課題と本日のグループワークで、ご自身の実習指導を振り返ることができましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
38	18	1	0	0
67%	32%	2%	0%	0%

4．本単元は、今後の実習指導および指導案に活用することができますか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
28	24	5	0	0
49%	42%	9%	0%	0%

Ⅱ．講義についてお伺いいたします。

1．特別講義「看護とケアリング」の講義はいかがでしたか。

とてもよかった	よかった	どちらでもない	あまりよくなかった	よくなかった
17	23	7	0	0
30%	58%	12%	0%	0%

2．特別講義「看護理論」の講義はいかがでしたか。

とてもよかった	よかった	どちらでもない	あまりよくなかった	よくなかった
20	31	6	0	0
35%	54%	11%	0%	0%

■第5回：平成30年1月30日（火）

最終の回であり、実習指導の総まとめが行われた。演習①実習指導の実際③（演習Ⅱ）　②実習指導の体験を語り合う、の2つのプログラムを企画委員が担当した。

①実習指導の実際③（演習Ⅱ）：受講生が実践した指導をもとに、うまくいった指導・うまくいかなかった指導、今後実践したい実習指導の具体的な行動についてグループで話し合い、全体で体験を共有した。グループワークでは、各自の実習指導実践が報告され、工夫した点や今後の課題など活発な意見交換がされていた。体験共有としての発表方法については、模造紙およびポストイットを活用してのグループメンバー全員での回覧方式を試みた。文字やイラストによる指導体験の記載は理解に役立ったようだ。また、他グループへの質問や感想をポストイットを用いてその場でフィードバックできたこと、教室内を移動しながら閲覧するという方法は、座学とのメリハリが生じ、効果的であったと考える。

②実習指導の体験を語り合う「病棟に広げよう—人を育み、人に育まれる文化」：午後は、実習指導で学生を育むことを基点にしつつ、人を育み育まれる組織文化へというように少し拡げた視点をもち、これまでの講義や演習などを個人で振り返ることを試みた。まずワークシートを手掛かりに、自分の病棟での立ち位置や期待されていること、この研修会で一番印象に残っていること（病棟に広げたいこと）、それらを含めて、自分自身がチャレンジしてみようと思うことを整理して書き出してみる時間を設けた。次に、受講生一人一人が病棟文化を創っていく大事な人であることであるということに改めて気づく機会となるよう、10人程度のグループを作りグループ内でチャレンジを発表しグループでエールの拍手を送るようにした。受講生の取り組む様子や発表内容から全体のまとめとしては効果的であったと考える。

第5回アンケート　研修生：66名
回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体
回答者数：59名(web 57名、紙2名)　回答率：89%

Ⅰ．実習指導のリフレクション、実習指導の実践についてお伺いいたします。

1．自施設において実習指導案を立案し、実習指導を実践できましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
10	28	3	8	8
18%	49%	5%	14%	14%

2. 事前課題の「実習指導で経験した場面」において、研修で学んだ学習内容と実践を結び付けることができましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
23	29	2	3	0
40%	51%	4%	5%	0%

3. 事前課題と本日のグループワークで、ご自身の実習指導を振り返ることができましたか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
38	18	1	0	0
67%	32%	2%	0%	0%

4. 本単元は、今後の実習指導および指導案に活用することができますか。

できた	まあまあできた	どちらでもない	あまりできなかった	できなかった
28	24	5	0	0
49%	42%	9%	0%	0%

II. 講義についてお伺いいたします。

1. 特別講義「看護とケアリング」の講義はいかがでしたか。

とてもよかった	よかった	どちらでもない	あまりよくなかった	よくなかった
17	23	7	0	0
30%	58%	12%	0%	0%

2. 特別講義「看護理論」の講義はいかがでしたか。

とてもよかった	よかった	どちらでもない	あまりよくなかった	よくなかった
20	31	6	0	0
35%	54%	11%	0%	0%

d. まとめと課題

学生の実習における学びの充実と実習指導者への支援を目指し、地域連携・フロンティアセンターの事業としての開催が3年目となった。研修会の企画内容は学外企画委員とともに検討を重ね、リフレクションの理論が充実した内容になった。また、最終回の全体発表の方法を改善した。

来年度は、同様の企画を検討しているが、受講生のアンケート記述内容も参考とし、よりニーズを反映した研修会を目指す予定である。

4. ホームカミング・デー

a. 目的

本学の卒業生・修了生の交流や卒後の学びの場を提供する。

b. 実施内容

第11回ホームカミング・デーは、「子育てしながら仕事を続けよう　結婚－子育て－キャリアアップ」というテーマで、本学で教鞭をとられていた鶴田惠子先生（聖隷クリストファー大学看護学部教授）を講師としてお招きし、シンポジストに13回生の江見香月さん（本学老年看護学領域）、佐藤かずみさん（特定非営利活動法人SIEN訪問看護ステーションりゅう）、21回生の髙橋裕子さん（虎の門病院）の3名の卒業生をお迎えして開催した。

鶴田先生のご講演では、出産・子育てをしながら仕事を継続されてきたご自身の体験を振り返りながら、約10年ごとに人生の節目としてさまざまなことに悩み、決断してきた経緯や、子育てしながら仕事におけるキャリアを考えていく上で参考となったWilliam Bridges氏の「トランジション理論」などをご紹介いただきながら、物事が大きく変化する人生のターニング・ポイントから「次の一歩」を踏み出してきた貴重な経験を語っていただいた。

3名の卒業生の皆様には、出産や子育てを経ながら様々な場でご活躍されている近況や、子育てしていく中での家族との協力方法、仕事を継続していくためにどのような調整が必要であったかなど、各々の皆様の体験談をご紹介いただいた。

最後の質疑応答では、子育てと仕事の両立に必要な支援などについて参加者より質問があり、鶴田先生より看護管理学の観点から日本の雇用の現状と課題についてご説明いただき、シンポジストの皆様からはご自身の体験を踏まえたご意見をいただきながら、参加者の皆様とも有意義な時間をもつことができた。

また、今回のテーマより当日はご家族で参加してもらえるように、小児看護学領域の先生方にご協力いただき、お子様も楽しめる快適な場をご準備いただいた。参加者の皆様からはとても好評で、託児所を活用しながらゆっくりと会に参加していただくことができた。

今後も卒業生・修了生の現状を踏まえたニーズを把握しながら企画内容を検討し、参加者数の増加を目指していくことが課題である。

c. アンケート結果

<ホームカミング・デーアンケート結果>

1. 受講者の背景と参加の動機

(1)参加人数 37名(アンケート回収数13名　)

(2)これまでのホームカミング・デーの参加回数

0回	1回	2回	3回	5回以上
10	1	0	0	2

(3)ホームカミング・デーをどのように知ったか(複数回答可)

同窓会誌	ホームページ	ポスターちらし	口コミ	教員を通して	その他
0	3	1	5	2	1

(4)参加された動機はなんですか

懐かしくなって	同窓生に会えると思って	教員と会えると思って	前回に参加して	プログラムに興味があって	最新情報を知りたいと思って	進学について情報を知りたくて	その他
7	5	5	2	7	0	0	1

2. ホームカミング・デー内容について

(5)プログラムはいかがでしたか

非常に良い	やや良い	あまり良くない	良くない
10	1	1	0

(6)参加しての感想

・将来の参考になりました。貴重なお話ありがとうございました。
・みんな変わっているようで、変わっていなくて良かった。あの頃を思い出した。
・久しぶりに刺激をうけ、楽しかったです。
・子育てしながら仕事をすることをあきらめないで子どものためを考えるということが大切だと感じた
・先生の楽しく身になるお話をお聞きすることができてとても充実した日となりました。
・鶴田先生の講演が素晴らしかったのでもっと多くの方に聞いていただきたかったです。
・日本で子育てしながら働くことについて、大変そうなイメージでしたが、お話をうかがって元気が出ました。
・鶴田先生のお話には共感するところが多くありました。

D. 実践研究部門

1. ケアリング・フロンティア広尾

a. リサーチ・フェスタ

平成30年1月29日（月）17時30分～19時30分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいて、赤十字リサーチ・フェスタを開催した。赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指したもので、今回で5回目の開催である。今年度は、参加する施設間の連携を強め、さらに多くの参加者との活発な交流を促進することを目的に、日本赤十字社医療センター研究推進プロジェクトチームとの協働のもと、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」の一部と合同開催を試みた。これまでの研究ポスター掲示、研究よろず相談、リサーチカフェなどに加え、「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）、研究ミニレクチャーもプログラムに加わり、多様な方法で看護研究に接する機会となった。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員など79名であり、昨年より増加傾向となった。また、当日の発表演題は「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表7演題、ポスター展示及び日本赤十字看護大学助成金による奨励研究やケアリング・フロンティア広尾の活動報告42演題、合計49演題と昨年の2倍以上の演題数となった。

今回初めて実施した研究ミニレクチャーでは、日本赤十字看護大学古城門靖子講師による臨床での取り組みをまとめていく実践報告の方法などについて講義があり、参加者は熱心に聴講していた。

今回は会場を「冬の院内看護研究発表会」参加のポスター発表（示説）のエリア、研究ミニレクチャーのエリア、ポスター展示と研究よろず相談・リサーチカフェのエリアと3つに分け、参加者は関心があるところを自由に回ることができるようなレイアウトとした。その結果、楽しい雰囲気の中で研究相談や情報交換がなされ、参加者からも日頃の業務から離れての自由な交流ができたとの反応がみられた。

資料　リサーチ・フェスタ参加者アンケート

Ⅰ．参加状況

・総出席者数 79 名
（日本赤十字看護大学 14 名、日本赤十字社医療センター40 名、レクロス広尾 2 名）
・アンケート回収数 38 名　　アンケート回収率 48%

Ⅱ．参加理由（複数選択者あり）

ポスター発表をしたから……14 名
ケアリング・フロンティア広尾活動報告に興味があったから……6 名
興味のあるポスター・プレゼンテーションがあったから……6 名
日本赤十字看護大学奨励研究発表をしたから……2 名
興味のある日本赤十字看護大学奨励研究があったから……1 名
リサーチ・カフェ（研究よろず相談）……1 名
研究ミニレクチャーがあったから……1 名
その他……6 名

Ⅲ．参加後の感想

1. 参加して良かった……そう思う 52%　ややそう思う 45%
2. 関心が近い人と交流できた
……そう思う 24%　ややそう思う 37%　どちらともいえない 31%　そうは思わない 5%
3. 研究へ取り組む意欲が高まった……そう思う 24%　ややそう思う 47%
どちらともいえない 21%　そうは思わない 8%
4. 研究成果を実践で活用したい
……そう思う 26%　ややそう思う 50%　どちらともいえない 16%　そうは思わない 3%
5. 実践と研究のネットワーク作りのきっかけになった
……そう思う 21%　ややそう思う 50%　どちらともいえない 24%　そうは思わない 2%
6. 「冬の院内看護研究発表会」と合同開催が良かった
……そう思う 47%　ややそう思う 39%　どちらともいえない 11%　そうは思わない 3%

Ⅳ．　自由記載欄

・看護現場の実践研究の説明は役に立つと思いました。
・自分で見たいところ、興味のあるものを詳しく知ることができた。楽しく参加することができた。
・先生たちのポスターを見る時間がありませんでした。残念です。
・発表会とポスター発表を同時進行しない方が活性化すると思いました。
・教員のポスターの前に立つ時間は決めないで、自由にしたほうが良いと思いました。

b. 高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト

度	平成29年度　報告書
プロジェクト名	**“最期までその人らしく生きることを支えるケア”プロジェクト**
リーダー	坂口　千鶴
プロジェクトメンバー	川上・横田・元田・平佐・及川（日本赤十字社医療センター）、岡本・伊藤（日本赤十字社総合福祉センター、千葉(京)・清田・江見・渡邊（日本赤十字看護大学）、比留間（博士後期課程）、藤原・菅野・三好（修士課程）
会のねらい	高齢者の終末期の定義、終末期のケアの構造が不明確な状態の中、病院、施設、在宅で高齢者の看取りをどのように行っていくのか、そのケアシステムを構築することを目的とする。平成26年度からのプロジェクト活動をもとに、平成29年度は、コアメンバー、スタッフ等の話し合いの結果を踏まえ、終末期にある高齢者とその家族へのケア（連携も含めて）について具体的なプログラムを2つ立ち上げ、実施した。
今年度の報告（概要）	**① 老年看護コース「最期までその人らしく生きることを支えるケア」** 平成29年度「老年看護コース：最期までその人らしく生きることを支えるケア」について全5回のコースを、医療センター、総合福祉センター、訪問看護ステーション、他の地域の看護師17名を対象に実施した。

回数	日程	場所	内容	参加者
第1回	7/28（金）	日本赤十字看護大学	講演会/老年看護コースオリ	30名
第2回	9/29（金）	日本赤十字看護大学	事例検討会（グループワーク）	28名
第3回	11/17（金）	日本赤十字看護大学	事例検討会（グループワーク）	20名
第4回	1/26（金）	日本赤十字看護大学	事例発表会（グループ）	27名
第5回	2/23（金）	日本赤十字看護大学	講演会	22名

② コンソーシアム広尾「最期まで自分らしく生きるとは」

コンソーシアム広尾は、広尾地区で生活する人々が互いの交流を通して、最期まで自分らしく生きるとは何か、そのためには何が必要なのかを考える機会となることを目的に、下記のとおり実施した。

回数	日程	場所	内容	参加者
第1回	8/25(金)	日本赤十字看護大学	最期まで自分らしく生きるとは？	10名
第2回	9/ 8(金)	日本赤十字社総合福祉センター	介護予防体験教室―健康づくりをしませんかー	14名
第3回	11/27(金)	日本赤十字社医療センター	住み慣れた地域で自分らしく暮らしていくために	7名
第4回	12/15(金)	広尾ガーデンヒルズ集会所	病いとともに自分らしく生きる～いのちの電話の相談活動から～	18名
第5回	3/16(金)	日本赤十字看護大学	最期まで自分らしく生きるとは―息子の立場から考える―	19名

次年度の予定（概要）	平成30年度は、終末期にある高齢者とその家族へのケア（連携も含めて）について、今年度と同様の内容で2つのプログラムを実施し、少なくとも1回は合同開催を目指す。その際、広報を充実させ参加者を募り、特にコンソーシアム広尾については参加組織を拡大させていきたい。

c. UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース

29 年度	平成 29 年度　報告書
プロジェクト名	UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー
プロジェクトリーダー	日本赤十字社医療センター　看護部 廣瀬孝子/中根直子
プロジェクトメンバー	日本赤十字社医療センター： 廣瀬孝子　川井由美子　大野芳江　田中律子　趙嬉瑛 日本赤十字看護大学：井村真澄　斉藤英子　新田真弓　喜多里巳
会のねらい	赤ちゃんにやさしい病院運動（Baby-Friendly Hospital Initiative） における母乳育児を保護・支援・推進できる病院スタッフの知識、技術、態度を育成する。 母親と赤ちゃんにやさしいケアを提供できるためには、スタッフ同士がやさしくサポートし合える関係を体験し、築くことが重要である。会においてはスタッフ同士のコミュニケーション能力やエモーショナルサポート能力、ピアサポート能力も育成する。
今年度の報告（概要）	「UNICEF/WHO 母乳育児支援ガイド　ベーシックコース」（医学書院）のテキストにそって 3 日コースを開催した。 日にち：7 月 30 日、8 月 20 日、9 月 30 日　各々8：00-17：00 10 月 22 日 11:00¯12:00　外部講師　杉本充弘医師特別講義 「あなたの病院を『赤ちゃんにやさしくする』には」 開催場所：日赤医療センター３階大会議室 トピック講義担当者（敬称略）医師：安藤、中尾、木戸、杉本、薬剤師：小林、助産師：井本、中根、赤山 事前の企画会議を複数回実施、名簿作成、資料準備、講師依頼・調整、当日の講義およびファシリテーション、事後ブリーフィングミーティング、コース終了後の感想レポート確認を行い、次回の課題抽出と企画につなげた。
次年度の予定（概要）	20 時間コースの開催日を今年度同様、7 月 8 月 9 月の毎月 1 回とする予定である。

d. 小児看護研究会　CandY（Children and You）

年度	平成 29 年度　報告書
プロジェクト名	小児看護研究会　CandY（Children and You）
プロジェクトリーダー	江本リナ（日本赤十字看護大学）
プロジェクトメンバー	江本リナ、川名るり、山内朋子、太田智子、鶴巻香奈子（日本赤十字看護大学）
会のねらい	子どもと家族にかかわる看護師やその他の専門職者が、実際に臨床場面で対応に困っていること、援助の方向性について悩んでいることについて、事例を通して考えたり、小児看護に関連したテーマについてディスカッションしたりすることを目的に、小児看護研究会を行っている。
今年度の報告（概要）	平成 29 年度の詳細は以下の通りである。

対象　子どもと家族にかかわる看護師、およびその他専門職者
参加費　500 円／年間（資料・お茶代として）
会場　日本赤十字看護大学内

	日時	場所	テーマ	出席者
第 1 回	4 月 19 日（水）13:30～15:00	205 教室	人工呼吸器装着中の幼児へのかかわり	16 名
第 2 回	5 月 17 日（水）13:30～15:00	204 教室	自殺企図のある思春期の子どもへのかかわり	16 名
第 3 回	6 月 7 日（水）13:30～15:00	204 教室	児童福祉施設における小児看護実践について	16 名
第 4 回	7 月 26 日（水）13:30～15:00	204 教室	看護師が内服困難子どもと捉える子どもと家族への看護	12 名
第 5 回	9 月 6 日（水）13:30～15:00	204 教室	29 週で出生した子どもの食事に関連した母親への支援について	13 名
第 6 回	10 月 11 日（水）13:30～15:00	209 教室	子どもの服薬行動への支援について	14 名
第 7 回	12 月 20 日（水）13:30～15:00	205 教室	肺移植待機中の子どもがその子らしさを保ちながら生活するための支援	13 名
第 8 回	1 月 31 日（水）13:30～15:00	204 教室	子どもの入院から手術に至るまでの過程に不信感を抱いた家族とのかかわり	20 名
第 9 回	2 月 21 日（水）13:30～15:00	503 教室	修士課程院生による研究の紹介	20 名

次年度の予定（概要）	平成 30 年度は、臨床の方にもプロジェクトメンバーに加わっていただき、事例提供を共同で企画する計画である。計 8 回の開催を予定している。

小児看護研究会の様子
Children and You (CandY)

e. TRC 研究会

年度	平成 29 年度　報告書
プロジェクト名	TRC 研究会
プロジェクトリーダー	守田美奈子
プロジェクトメンバー	・加藤ひろみ、関根光枝、渋谷紋子、今井早良、池田美里、齋藤侑郎、（日本赤十字社医療センター） ・守田美奈子、本庄恵子、住谷ゆかり、酒井智恵（日本赤十字看護大学）
会のねらい	「学は分野横断的」、「実践は地域一体型」という理念のもとに、学と実践の有機的交流を通じた、新たな腎不全医療モデルの創造を目的とする。
今年度の報告（概要）	①「腎不全患者へのケアー患者・家族の幸せを目指すケア（赤十字腎不全ケア研究会）」の表題で小冊子を製本することができた（赤十字看護・介護助成制度）。この冊子には、外来カンファレンス、面談、保存期情報共有シート、ピア・ラーニング、学習支援といった外来での多様な支援方法を具体的に示し、それらを患者の個別状況や特性に即して組み合わせて提供する「外来における多職種でのケア提供システム」を腎不全ケアモデルとして提示した。 ②成果の一部であるピア・ラーニングの方法を、H29 年度の日本赤十字看護学会学術集会で公表した。 ③研究会で作成した冊子は、日赤医療センターで実施している研修会で活用している。 ④H29 年は、TRC の看護セミナーを 1 回開催した。
次年度の予定（概要）	研究費の助成期間が終了し、目的であった腎不全患者へのケアの冊子を作成することができた。 今後は、臨床で活用し、その評価を得ながら修正を図る予定である。 よって実質的な活動は終了したこととする。

f. セルフケア能力を高める支援の検討会

年度	平成29年度　報告書
プロジェクト名	セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ研究会）
プロジェクトリーダー	古川祐子（日本赤十字社医療センター）
プロジェクトメンバー	古川祐子、加藤ひろみ、那須照代、池田美里、鈴木恵子、加藤まこと、今野康子、渋谷紋子、石井佳代、スミス美保子、小林千恵、本宮美幸、矢野京子（日本赤十字社医療センター） 本庄恵子、田中孝美、和田美也子、桐原あずみ、細井美沙子、工藤有希（日本赤十字看護大学）
会のねらい	入院―外来通院－在宅療養を視野に入れ、一人ひとりの生活を視野に入れたセルフケア支援を展開することをめざす。志を同じくする仲間を募り、広尾地区の赤十字から、セルフケア支援を世の中に向けて発信する。
今年度の報告（概要）	（1）　SCAQ研究会（月に1回　開催）：日本赤十字社医療センターで、月に1回1時間、研究会を開催し、セルフケア支援を展開する方略を練った。 ★アクション・リサーチ：「地域中核病院における病棟－外来－地域をつなぐセルフケア看護支援の構築」を、赤十字助成金の助成を受けて実施している。 地域との連携については、腹膜透析でのつながりがある地域病院のスタッフなどを対象とした勉強会を開催した。 （2）事例検討・活動検討：SCAQを活用したセルフケア支援を実施した看護師が、事例を提示し検討した。H29年度に「コアナースのためのセルフケア支援研修」を受講した看護師たちと、実践のリフレクションを行い、セルフケア支援の学びを深めた。 （3）電子カルテに含むセルフケア支援記録：SCAQを使用したセルフケア支援を記録できるように、SCAQスコアと支援内容の記入、および、SCAQのレーダーチャート（エクセルファイル）の電子カルテ導入がおこなわれ、有効に活用する方法を話合った。 （4）院内教育にセルフケア支援教育を導入：プロジェクトメンバーと院内の教育企画室と連携して、経験年数3年程度の看護師を対象とした「セルフケア支援研修」を、院内教育に位置づけ実施した。この若手の看護師をサポートする「コアナースのためのセルフケア支援研修会」を実施した。
次年度の予定（概要）	（1）　定例研究会と事例検討の継続、メンバーの追加：月1回の定例研究会を継続し、地域につなぐことに力を発揮できるメンバーの追加を検討する。 （2）　研修会：組織内では、院内研修をうけた看護師のフォローアップをおこなうとともに、次年度も教育企画室と協働で院内研修を企画する。 （3）　成果の公表：看護系の学術集会にて、H29の成果を公表する。 ＊平成30-31年度赤十字助成金の助成を申請中。

g. シームレスな看護師教育モデルの検討

年度	平成29年度　報告書
プロジェクト名	シームレスな看護師教育モデルの検討： しなやかな葦のような強いナースを育てる会
プロジェクトリーダー	川上潤子（日本赤十字社医療センター）
プロジェクトメンバー	川上潤子・渡邉美香・後藤薫・加藤まこと・高橋有希・鬼頭幸子・野口歌奈子（日本赤十字社医療センター） 江本リナ・本庄恵子・守田美奈子・佐々木幾美・西田朋子（日本赤十字看護大学）
会のねらい	教育現場と臨床が相互に協力しあい、基礎教育から継続教育に至るまでのシームレスな教育モデルを検討する。また、骨太のナース、しなやかな葦のような強いナースを育むことをめざす。
今年度の報告（概要）	卒後2、3年目看護師による新人看護職員研修の評価を目的とし、平成28年度に、臨床経験2年目2名および3年目2名の看護師を対象に、2年目と3年目の合同グループインタビューと2年目と3年目それぞれに分けたグループインタビューを実施した。 平成29年度は、平成28年度に行った2年目と3年目の合同グループインタビューで得られたデータを、看護職としての成長に繋がったことや課題について当事者の視点と意味づけの観点から分析しカテゴリー化を図った。その結果、卒後2、3年目の看護師の新人研修における体験が5つに分類された：(1)成長の実感、(2)先輩からの具体的なアドバイスによる実践のイメージ化、(3)同期同士で分かち合う、(4)理想と現実の往復、(5)大学での基礎的な学びを実践に生かす。 この結果から、新人看護師研修は学生時代に身につけた知識や技術の応用を学び実践をイメージ化させたり、理想と現実のギャップを埋めたりする機会となっていることが明らかにされた。また、日々の実践を通して基礎教育で学んだことに立ち返り、先輩や患者から知識や技術を習得して成長していくことが明らかにされた。そして、同期同士や他者からのフィードバックが成長の重要な鍵になることが示唆された。 これらの研究成果を、第18回日本赤十字看護学会学術集会にて発表した。
次年度の予定（概要）	①2年目と3年目それぞれに分けたグループインタビューの結果を分析し、それぞれの時期による新人看護職員研修の捉え方を明らかにする。 ②合同グループインタビューの結果と統合し、新人看護職員研修の課題を明らかにする。 ③看護基礎教育との連続性、看護実践能力の獲得、キャリア発達の視点から分析を重ね、基礎教育と臨床が相互に協力し合える研修のあり方を検討する。

平成 29 年度　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター実績報告
作成年月　平成 30 年 3 月
発行　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター
編集　フロンティアセンター　広報
〒150-0012　東京都渋谷区広尾　4-1-3
日本赤十字看護大学
電話：03-3409-0875
FAX：03-3409-0589